

[資料]

## 介護支援専門員が行う事例検討会の期待と課題

工藤 雄行<sup>1)</sup>、大沼 由香<sup>2)</sup>、峯尾 武巳<sup>3)</sup>

### 要 旨

本調査は介護支援専門員へのアンケートを通して、事例検討会への期待や課題を明らかにすることを目的とする。全国3箇所の日本介護支援専門員協会の支部、及び市町村のケアマネ会に所属する介護支援専門員76名を対象に、集合調査法による自記式質問紙調査を実施した。事例検討会に期待する効果として、参加者、事例提供者それぞれの立場に共通していた項目は、アセスメント力の向上、自己覚知の機会となることであった。事例提供者に関しては特に、まとめる力、書く力といった事例提供技術習得に対する期待が大きいことが明らかになった。自由記載の分析からは、4つのカテゴリーが生成され、特に「参加者に求められる視野の広がり」と態度からは、参加者の事例検討会を構成する一員としての自覚や、主体的姿勢、内省的視点を常に意識して事例検討会に臨むことの必要性が課題として明らかになった。

キーワード：介護支援専門員、事例検討会、課題、期待、参加者

### I. 問 題

介護保険制度における介護支援専門員の役割について、介護支援専門員（ケアマネジャー）の資質向上と今後のあり方に関する検討会<sup>1)</sup>は「介護支援専門員は、利用者が自立した生活を営むのに必要な援助に関する専門的知識及び技術を有する者として、介護保険制度を運用する要として重要な役割を担っている。介護保険制度においては、利用者の尊厳の保持を旨とした自立支援を実現していくことが重要であり、そのためには、介護支援専門員による適切なケアマネジメントは必要不可欠であり、その質の向上は不断に求められるものである」と述べている。白澤<sup>2)</sup>は介護支援専門員の研修体系について、単にケアマネジメントの知識を習得するといったことではなく、個々の事例を介して、いかにかわり、いかにニーズを明らかにし、いかにサービスに結びつけるか、そうした能力を身につけていくことが重要であるとし、事例研究等の演習を中心とした研修が求められる

と提言している。

現在、介護支援専門員の質向上への取り組みとして、更新研修や主任介護支援専門員研修等に事例検討が取り入れられている。前沢は主任介護支援専門員の能力差が大きいことや研修指導者の訓練が不十分であることから、参加型学習を重視した研修体制の改善を指摘している<sup>3)</sup>。事例検討会は参加型学習であると同時に、経験から学ぶ経験型学習としての効果もあり、介護支援専門員の質向上に向けた研修方法として期待されているが、一方では困難性も指摘されている。事例検討会への参加を困難にしている要因として、十分に機会が作れず時間も取れない、準備に時間がかかりすぎる、参加しても充実感が得られない、どう進めていったらよいかわからない等が挙げられている<sup>4)</sup>。本調査では、介護支援専門員が事例検討会にどのような期待を抱いているのか、またどのようなことが課題だと感じているのか明らかにすることを目的とする。

1) 弘前医療福祉大学短期大学部 生活福祉学科 介護福祉専攻 (〒036-8102 青森県弘前市小比内 3-18-1)

2) 弘前医療福祉大学 保健学部 看護学科 (〒036-8102 青森県弘前市小比内 3-18-1)

3) 神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部 社会福祉学科 (〒238-8822 神奈川県横須賀市平成町 1-10-1)

## II. 方法

### 1. 対象者

調査協力の承諾が得られた全国3箇所の日本介護支援専門員協会の支部、及び市町村のケアマネ会に所属する介護支援専門員76名。

### 2. 調査期間

2012年7月～12月

### 3. 調査方法

集合調査法による自記式質問紙調査を実施した。事例検討に関する研修会に参加した介護支援専門員に対して、研修前に本調査の主旨等について書面を用いて説明し依頼した。調査用紙はその場で配布し、記入してもらい、調査協力への同意の得られた参加者の調査用紙のみ回収した。回収率は100%であった。

### 4. 調査項目

- 1) 調査協力者の属性（性別、年齢、基礎資格、介護支援専門員としての経験年数、主任介護支援専門員資格の有無、勤務先、雇用形態、現在の役職、現在の仕事の満足度、現在の仕事の継続意向）
- 2) 調査協力者の事例検討会参加状況、事例提供の経験の有無、事例検討会におけるスーパーバイザー、コメンテーターの有無
- 3) 事例検討会への参加による効果が大いと思うもの（相談面接力、アセスメント力、プランニング力、モニタリング力、評価力、チーム力、コミュニケーション力、ケアマネジャーに必要な知識、ケアマネジャーとしての価値観、ファシリテーション力、自己覚知、観察力、まとめる力・書く力、発表力、問題解決力）
- 4) 事例提供者にとって効果が大いと思うもの（上記3括弧内項目と共通）
- 5) どのような事例検討会であれば、参加・事例提供したいか、以上である。

調査項目3、4は括弧内より3つ選択してもらい、調査項目5は自由記載とした。

### 5. 分析方法

調査項目1～4については、単純集計を行い、調査項目5については、安梅<sup>5)</sup>の質的内容分析の手法を用いた。分析の過程は記載内容を熟読し、設問に関する中心的内容、意味深い内容を抽出しコード化する。そして、関連性のあるコードごとにカテゴリーを生成し、カテゴリー間にどのような関係性があるのか研究者間で十分な検討を行い、研究指導実績のある研究者に、内容の妥当性と信頼性を確認した。

### 6. 倫理的配慮

調査協力者に対し、本調査の主旨と方法、調査協力の

任意性、不利益の有無等について書面を用いて説明し、調査用紙の提出をもって研究への同意が得られたものとした。本調査は、神奈川県立保健福祉大学研究倫理委員会の承認を受け実施された。

## III. 調査項目の集計結果

### 1. 回答者の概要

別表1の通り、男性13名(17.1%)、女性62名(81.6%)、無回答1名(1.3%)であった。平均年齢は50.4歳で、32歳から68歳の範囲であった。40歳未満9名(11.8%)、40歳～50歳未満25名(32.9%)、50歳～60歳未満30名(39.5%)、60歳以上9名(11.8%)、無回答3名(3.9%)であった。基礎資格については、介護福祉士が38名(50.0%)、看護師18名(23.7%)、社会福祉士6名(7.9%)、その他14名(18.4%)であった。

### 2. 回答者が参加している事例検討会について

別表2の通り、事例検討会への参加経験がある介護支援専門員は69名(90.8%)、参加経験がない介護支援専

表1 対象者の概要

実数=人数( )=%

1. 性別				
男性	女性	無回答		
13(17.1)	62(81.6)	1(1.3)		
2. 年齢				
40歳未満	40～50歳未満	50～60歳未満	60歳以上	無回答
9(11.8)	25(32.9)	30(39.5)	9(11.8)	3(3.9)
3. 基礎資格				
介護福祉士	看護師	社会福祉士	その他	
38(50.0)	18(23.7)	6(7.9)	14(18.4)	
4. 経験年数				
3年未満	3～5年未満	5～7年未満	7～10年未満	10年以上
19(25.0)	7(9.2)	11(14.5)	18(23.7)	21(27.6)
5. 主任介護支援専門員資格取得の有無				
取得している	取得していない	今年度中に取得予定		
36(47.4)	37(48.7)	3(3.9)		
6. 勤務先				
居宅介護支援事業所	地域包括支援センター	施設(特養・老健)	グループホーム	その他
59(77.6)	9(11.8)	3(3.9)	1(1.3)	4(5.3)
7. 雇用形態				
常勤	非常勤	契約	無回答	
66(86.8)	6(7.9)	3(3.9)	1(1.3)	
8. 現在の役職				
管理者	その他	なし	無回答	
26(34.2)	9(11.8)	23(30.3)	18(23.7)	
9. 現在の仕事の満足度(10点満点で評価)				
1～3点	4～6点	7～9点	10点	無回答
2(2.6)	22(28.9)	48(63.2)	2(2.6)	2(2.6)
10. 現在の仕事の継続意向				
継続したい	どちらともいえない			
55(72.4)	21(27.6)			

門員は6名(7.9%)、無回答1名(1.3%)であった。事例検討会への1年間の参加頻度は、1回15名(19.7%)、2~3回21名(27.6%)、4~5回6名(7.9%)、6~9回11名(14.5%)、10回以上10名(13.2%)、不定期1名(1.3%)、0回6名(7.9%)、無回答6名(7.9%)であった。事例検討会への参加による効果が大きいと思うものとして選択数の多かった項目は、アセスメント力41名(18.4%)、自己覚知27名(12.1%)、問題解決力27名(12.1%)であった。事例提供者にとって効果が大きいと思うものとして選択数の多かった項目は、アセスメント力34名(15.0%)、まとめる力・書く力34名(15.0%)、自己覚知31名(13.7%)であった。

「どのような事例検討会であれば、参加したい・事例提供したいと思うか」という設問への記載内容の分析の結果、別表3の通り、7つのサブカテゴリーが得られ、最終的に【事例提供者の負担軽減】、【参加者に求められる視野の広がりと態度】、【検討目的の明確化】、【質向上と明日への活力】の4つのカテゴリーが生成された。以下、カテゴリーには【 】, サブカテゴリーには《 》、コードには〈 〉を表記する。

#### 1) 【事例提供者の負担軽減】

このカテゴリーに含まれる《事前準備の時間的・精神的負担》は、事例検討会の発表者が、発表するに当たっての書類準備(提供事例の整理、配布資料の作成等)に費やす時間が多いため、書類準備が簡単で負担が少ない事例検討会であれば事例を提供したい。また、事例提供者の負担を軽減するために、提供事例の

具体的な書き方等についても運営側に関わって欲しいということであった。

#### 2) 【参加者に求められる視野の広がりと態度】

このカテゴリーには《対象の問題にのみ着目》、《自己の振り返りと視野の広がり》、《安心できる検討の場》が含まれる。《対象の問題にのみ着目》は、事例検討会で取り上げるテーマが、実務に役立ち、現在介護支援専門員が関わっている様々なケースと一致している場合や、困難事例でうまく対応できた、若しくは失敗した事例が取り上げられる場合には参加したいということであった。《自己の振り返りと視野の広がり》は、〈事例検討会で多職種の意見を聞ける〉、〈多様な観点、視点を勉強できる〉等、介護支援専門員が期待する様々な成果が得られる事例検討会であれば参加したいということであった。《安心できる検討の場》は、〈何でも言える雰囲気〉、〈否定的意見を言われたい〉、〈共感してもらえたい〉等、事例検討会に、受容的態度や共感的理解が備わっていれば参加したいということであった。

#### 3) 【検討目的の明確化】

このカテゴリーに含まれる《検討目的の明確化》は、〈課題解決を話し合える〉、〈方向性が見いだせる(解決しなくてもよい)〉等、事例検討会の最終的な到達点が曖昧な形で終わるのではなく、はっきりと明示されている事例検討会であれば参加したいということであった。

#### 4) 【質向上と明日への活力】

このカテゴリーには《表現力のレベルアップ》、《明日への活力》が含まれる。《表現力のレベルアップ》は、

表2 回答者が参加している事例検討会について

実数=人数( )=%

1. 参加状況				
参加経験あり	参加経験なし	無回答		
69(90.8)	6(7.9)	1(1.3)		
2. 事例検討会への参加頻度(年間)				
1回	2~3回	4~5回	6~9回	10回以上
15(19.7)	21(27.6)	6(7.9)	11(14.5)	10(13.2)
不定期	0回	無回答		
1(1.3)	6(7.9)	6(7.9)		
3. 事例提供経験の有無				
経験あり	経験なし	無回答		
43(56.6)	19(25.0)	14(18.4)		
4. 事例検討会におけるスーパーバイザーやコメントーターの有無				
いる	いない	いる、いない両方	無回答	
49(64.5)	6(7.9)	17(22.4)	4(5.3)	
5. 事例検討会への参加による効果				
上位3項目	アセスメント力	自己覚知	問題解決力	
	41(18.4)	27(12.1)	27(12.1)	
6. 事例提供者の効果				
上位3項目	アセスメント力	まとめる力・書く力	自己覚知	
	34(15.0)	34(15.0)	31(13.7)	

表3 カテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリー		サブカテゴリー
I	事例提供者の負担軽減	事前準備の時間的・精神的負担
II	参加者に求められる視野の広がりと態度	対象の問題にのみ着目
		自己の振り返りと視野の広がり
		安心できる検討の場
III	検討目的の明確化	検討目的の明確化
IV	質向上と明日への活力	表現力のレベルアップ
		明日への活力

〈発表力の勉強ができる〉、〈表現力の勉強ができる〉等、介護支援専門員として通常業務を遂行する上で必要な意思伝達能力のスキルアップに繋がる事例検討会であれば参加したいということであった。《明日への活力》は、〈共通する問題意識をもった専門家集団が参加している〉、〈多職種の専門的意見交換ができる〉等、事例検討会に参加することにより、問題意識の共有化を通して、他の参加者から問題解決に必要な新たな視点や考えを学ぶことができるとともに、意見交換等の機会を通じて仕事に取り組む上での刺激となり、自らのモチベーションを向上させることにも繋がる事例検討会であれば参加したいということであった。

#### IV. 考 察

##### 1. 事例検討会への期待

事例検討会に期待する効果として参加者、事例提供者それぞれの立場において共通して割合の高かった項目は、アセスメント力、自己覚知であった。白澤<sup>2)</sup>は介護支援専門員に求められる基本姿勢は、利用者を適切に理解していく自己覚知やアセスメント能力であると述べている。介護支援専門員の業務は、居宅サービス計画（介護予防サービス計画）の作成やサービス事業者との連絡調整等多岐に渡る。回答者は、あらゆる場面に適切に対応するためにアセスメント力や自己覚知の重要性について自覚し、そのスキルアップの場として事例検討会に期待を抱いていると考える。

事例提供者の立場としては、まとめる力、書く力を得ることへの期待が特に大きいことが分かった。事例提供の際に必要な事例情報をまとめる力、書く力等の技術について、上原<sup>6)</sup>は「各種専門教育課程の中で事例提供技術についてトレーニングを受けた職種は存在せず、現場に出てから見よう見まねで学習するしかない」と述べている。回答者の多くは事例提供者として事例検討会に関わる際、まさに事例提供技術のスキルアップの場として捉え、更なる向上を目指していると考えられる。しかし自由記載の分析からは、事例提供に際しての書類準備に費やす時間的、精神的な負担が大きいことも明らかになっており、事例提供技術のスキルアップに期待している反面、一方では諸準備に関する負担感も抱いている実情が垣間見えた。その他自由記載の部分からは、事例検討会の目的が明確であること、事例検討会が介護支援専門員に求められる様々な能力の向上だけでなく、業務に取り組む上でのモチベーション維持のための内発的動機付けを得る機会となることへの期待も見出された。

##### 2. 事例検討会の課題

回答者の自由記載の分析の結果、明らかになった4つのカテゴリの中で、特に着目されるのは【参加者に求められる視野の広がりと態度】である。事例検討会の参加者は、事例検討会を自己の振り返りの機会であると捉えている一方で、《対象の問題にのみ着目》に見られるように、経済的事由に関するケースや介護拒否のケース等、各自が最も関心のある個別ケースが事例検討会で取り上げられることに期待を寄せており、その個別ケースに対する適切な対処法や知識を得ることに執着しがちであると考えられる。事例検討会への参加を通して期待される効果に関しても、問題解決力が上位に位置している。岩間<sup>7)</sup>は、事例研究における主役を事例提供者と参加者であるとし、参加者には「事例に向かう主体的姿勢と自らの実践に目を向ける内省的視点が求められる」また、「参加者にとって学びの多い事例研究にするためには、受け身ではなく、主体的にケースカンファレンスに参加し、自らが事例研究をつくっていくようにかかわることが求められる」としている。事例検討会が参加型学習であるならば、その参加者には、自分が興味のあるケースにのみ着目し対処法を学んだり、事例提供者の話に耳を傾けるだけの観衆になることなく、一人一人が自らも事例検討会を構成する一員としての自覚を持つこと、そして岩間が提言する主体的姿勢や内省的視点を常に心がけ事例検討会に臨むことが必要であると考えられる。

#### V. 結 論

- 1 事例検討会に期待する効果として、参加者、事例提供者それぞれの立場に共通していた項目は、アセスメント力の向上、自己覚知の機会となることであった。事例提供者に関しては特に、まとめる力、書く力といった事例提供技術習得に対する期待が大きいことが明らかになった。
- 2 自由記載の分析からは、4つのカテゴリが生成され、特に【参加者に求められる視野の広がりと態度】からは、参加者の事例検討会を構成する一員としての自覚や、主体的姿勢、内省的視点を常に意識して事例検討会に臨むことの必要性が課題として明らかになった。

#### VI. 本研究の限界と課題

本研究の限界は、調査対象者が特定の地域に限られていることである。更に調査対象地区や対象者の拡大等を通して、本研究の結果を検証していく必要がある。今後

の課題としては、調査から明らかになった結果やカテゴリーを踏まえ、介護支援専門員が参加しやすい事例検討会について検討を重ねることである。

## 謝 辞

本研究を行うに当たり、ご協力いただきました介護支援専門員並びに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、平成24年度弘前医療福祉大学共同研究助成を得て実施した。

(受理日 平成25年10月31日)

## 引用文献

- 1) 介護支援専門員（ケアマネジャー）の資質向上と今後のあり方に関する検討会：介護支援専門員（ケアマネジャー）の資質向上と今後のあり方に関する検討会における議論の中間的な整理，2013.
- 2) 白澤政和、橋本泰子、竹内孝仁：ケアマネジメント概論，中央法規，2000.
- 3) 前沢政次：ケアマネジメント研修の政策と展望，ケアマネジメント学No.10，ワールドプランニング，2012.
- 4) 天賀谷隆、遠藤淑美、末安民生他：実践 精神科看護テキスト第1巻 看護実践 看護倫理，精神看護出版，2007.
- 5) 安梅勅江：ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開，医歯薬出版株式会社，2001.
- 6) 野中 猛、高室成幸、上原 久：ケア会議の技術，中央法規，2007.
- 7) 岩間伸之：援助を深める事例研究の方法 対人援助のためのケースカンファレンス，ミネルヴァ書房，2007.

---

## Expectations and Issues Facing Care Manager Based Case Study Committees

Yuko Kudo <sup>1)</sup> Yuka Ohnuma <sup>2)</sup> Takemi Mineo <sup>3)</sup>

1) Hirosaki University of Health and Welfare Junior College

2) Hirosaki University of Health and Welfare

3) Kanagawa University of Human Services

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the expectations and issues facing case study committees through the administration of surveys to Care Managers. The self-administered survey was conducted on 76 Care Managers who were either affiliated with one of three national branches of the Japan Care Manager Association or members of a local Care Management Group. Both participants and case study contributors replied that their expectations for effective case study committees included improved assessment skills and an opportunity for self-perception. In particular, case study contributors showed high expectations for development of technical skills such as writing and summarizing. The free description answers were analyzed and categorized into four groups, to include “a broader perspective and attitude among participants”. Issues to address concerning case study committees were clarified through our study, and include a continual awareness among case study committee participants towards maintaining self-perception, a proactive attitude, and an introspective view as one member of an organization.

key words: Care Manager, Case Study Committees, Issues, Expectations, Participants